第七章 戦争と民衆

第一節 戦後地域文化運動と福生の青年

戦後地域文化運動

「戦後地域文化運動」という言葉は、学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問的・学問の「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂」「魂「
第１節 戦後地域文化運動と福生の青年

戦後地域文化運動と福生の青年

むる必要がある。（そこでこのテーマについては、新井勝経が「集団内の地域文化運動の１《6》の「隣人」の中で詳細に分析紹介しているので、あわせて参考にしてほしい）。

で、早く、目覚めて行動を開始したところが運動の発火点ではあるが、その火は単一ではなく、同時多発といえる。

まず、南多摩郡鶴川村（町田市）の「部落文庫」の動きが口火を切るかたちで、終戦二か月後の昭和二〇年一〇月から動きはじめた。私立南多摩農村図書館を核に浪江歴が、各地に呼びかけて文庫活動を開始するのである。ミニーから動きはじめた。あるいは図書館運動が先陣を切っていることが、三多摩地域文化運動を象徴しているともいえる。鶴川村の動きはすくに、橋本義夫の播磨監の動きへと派生している。

一方、同様昭和二〇年秋頃、北多摩では国分寺町本多（国分寺市）の青年たちによって「黎明会」が発足し、会誌『黎明』を発行して、言論、創作活動をはじめていた。翌二十一年一月には「谷保村青年会（国立市）」も発足し、青年たちを核にして新しい動きがでていた。

戦から半年後（昭和二一年一月から二月）である。福生と熊川の青年たちはそれらに先立って動きだしている。
第5編 第7章 戦争と民衆

図V-99 福生青年団発足式宣達
（昭和20年11月3日 橋本孝蔵文書）

発足式での宣言は次のとおりである。

組織を、もとの原点にもとづくような新生をはかったのである。

新唐を、もとの原点にもとづくような新生をはかったのである。

終戦から間もなく青年団再編成に向けての動きが始まり、
それぞれわずか8日後の11月3日、橋本孝蔵、山崎
良之助、井上重雄らによって「福生青年団」を再編発足させ
ている。団長は橋本、副団長が山崎、男子部長が井上、評議
員に清水茂、井上利雄、箏本保治、桑林重雄などの陣容でス
タークした。さらに第二支部として、井梅伊助（支部長）、
細谷利男（副支部長）を中心としたグループを発足させ、昭
和16年に戦争協力組織の「青少年団」に改組させられた組

又、官僚的、軍国的な大日本青少年団も改組を必至と見られていたのである。

之等の情勢より新青年団発足の気運
第1節 戦後地域文化運動と福生の青年

は、心ある若者の胸中に芽生えたのである。この時に於いて、前青年団長橋本孝蔵氏は社会運動の中堅たるべき強力なる青年団の発足を図り、一部に於いて、福生第一国民学校の講堂に於いて、我々の若者、他の艱難を受ける青年のみの青年団たる新しい組織の下に、再建日本の大道を踏出したのである。

「新しき酒は新しい壺に。新しい思想を有する我々が郷土の若者たち、他の艱難を受ける青年のみの青年団たる新しい組織の下に、再建日本の大道を踏出したのである。

長い間軍国主義や独裁主義に強制、剝奪させていた国民が「新政治、新経済、社会運動」を演じたが、なかなかこれに呼びかけた発足したのである。よって、榊本は青年が軍歌でなく、思い切り唱える歌がほしいと、一つの歌をつくった。

橋本自身は「青年の悩みを

この金などに頼らずに、あくまで青年の力でやって行くという意気込みは誠にさかんなものであった」という自負心と、団に対する並々ならぬ決意と情熱を感じとることができると、昭和二十年十一月に戦後の新しい青年団が結成されました。ですから、あくまで自主的な組織で、町から補助金などを貰わず、あくまで青年の力でやって行くという意気込みは誠にさかんなものであったと云うその勇気は、榊本の心の源泉を示すものなのである。
図 V-100 楽譜「理想の下に」（橋本家文書）

そのままぶつかったような文句（前同）といっているが、『理想の下に』とい
うタイトルが示すように、それまでの暗くて重い重石をはねのけるような清新
な言葉にあふれていた。節も自己流でつくったが、のちにNHKの音楽部にい
た橋本の友人に本譜に直してもらったといっている。

一多摩の流れは清くして
自由は今や吾にあり
理想の下にいうゆかん

自由は今や吾にあり
名利私欲に眼をくらむ
ああ混沌の世に処して
理想の下にいうゆかん

（三番以下もリフレイン）
戦後地域文化運動と福生の青年

第1節 戦後地域文化運動と福生の青年

鉄つ遊はたかに

聞けよ響きを建てる

ああ私の理想高くて

よしその道は果て遠く

波乱曲折あるとても

力のかざり根かぎり

共に進まん、いさやいさ

集う健児は八百名

その名もゆかし福生まち

等叫びは小さけど

やがては響く大洋の

寄せては返す波のこと

（前同「福生青年団あればこれに

一番の歌詞にある「富と力の支配する古き日本よいざきさらば」にみられるように、戦争にあけられてきた軍国主義

を断ち切り、「自由」を得た青年は、いまこそ理想の社会を築かなければならないと訴えている。その道は「遠く」

波乱曲折はあるかもれないが、八〇〇名もの青年が立ちあがれば理想の社会をつくりあげることができると

いう。主として歌詞も一番と六番だけが唱えられるようになっているが、一番に込められた思い

は強くあるからこそ、歌われたのである。橋本は「団歌」としてつくったわけではないといっているが、

しかも「青年団歌」のようにうたわれるようになっていった。

青年団ニュース

青年団結成の二月後には「福生青年団ニュース」第2号（昭和二二年四月一〇日）を発行して

と活動の記録

その巻頭で橋本孝蔵は「青年の力」と題して次のような「檄」をとばしている。
長い間青年は自分の力の偉大なる事を忘れていた。いやむしろ忘れさ
されるのはただ一つ。誰れもがもが云ふ様に、明治維新は昭和二大の
力であった。その後長い間、青年には一つの発言すらとらあげられ
なかった。年が若く、経験がない、苦労がたりない、そう云って
老人は青年の力を信じたものではない。

戦争中の様に特攻隊へかたりたかった。それで青年の力を利用す
しただけで、本当に青年の力を信じたのではない。だから多くの青年
は何をやってもダメだと思ひ込み、自然と遊び
に走ったのです。歌を唱へ、映画を見て一日もやり過ぎ、昔はそれこの
よかっただけのです。それきり外に出来る事はなかったから。

心のある人達は、これではいけないと心配して、居ればいい様な団でもね。

今こそ我々に働く行動と発言の自由が与えられたのである。我々は理想的な社会を
同様に遊びだけを考えて始めてきた。これでいいのだろうか。多く

の青年団はもう昔の様々な単なる遊び場所ではな
く、よりよい郷土、よりよい日本を作る為に過去の力と間はねばならない。マッカーサー指令部の指示

図 V-101「福生青年団ニュース」第1号
（昭和21年1月10日 橋本家文書）
第１節 戦後地域文化運動と福生の青年

を待つばかりでは真のよき社会は生まれない。な
今若し青年が立ちあがらないとしたら、それは卑怯者である。働くべき場所を充分あり、発言の自由になった。

今こそ青年は自らあげまして、人らはあげません、共に立ちあがる時です。大いにごんぼりましょう。

長い間、押さえつけられてきた「青年の力」を、いまこそ古い顔から解放し、責任ある「行動と発言」に向かわせ
る努力をすべきだと訴えた。それは「過去の力」とたたかう、マッカーサー指令部の指示に、わけのわからない。

日中ぼんやりしているような若い青年の心を駆動する言辞を、次々と発していた。

また、ニュースは、「女子の方々」として、参政権を得た女性に対しても「正しい政治は正しい貴女の投票
によって生まれます」といった、紙芝居や幻灯写真で政権についての学習会をすることを知らせている。

このように国技倉本の言葉は、新生青年団の行動の指針となり、次の中じょう活動に結びつく大きな起爆剤となっ
たのである。

それでは、青年団はどのような活動を展開したのであるか。まず、大正二０年四月、一階部分を使用しはじめ、東京消防署福生出張所に出た。立退じるよう運動をおこす
と、町民座談会などを、詳細は不明であるが、直接民主制の動きもいえた。また、読書会、英語講習会、華道の講

町民座談会などを、詳細は不明であるが、直接民主制の動きもいえた。また、読書会、英語講習会、華道の講

町民座談会などを、詳細は不明であるが、直接民主制の動きもいえた。また、読書会、英語講習会、華道の講

町民座談会などを、詳細は不明であるが、直接民主制の動きもいえた。また、読書会、英語講習会、華道の講

町民座談会などを、詳細は不明であるが、直接民主制の動きもいえた。また、読書会、英語講習会、華道の講

町民座談会などを、詳細は不明であるが、直接民主制の動きもいえた。また、読書会、英語講習会、華道の講
第5編 第7章 戦争と民衆

表 V-24 青年団の活動記録（昭和20〜21年）

<table>
<thead>
<tr>
<th>活動内容一覧</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. 俱楽部を占領した東京消防署福生出張所立退き運動</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 「部落の人を慰める娯楽会」を子どもたちと開催</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 戦災者のためのバザー（昭和20年11月頃）</td>
</tr>
<tr>
<td>4. 「青年団ニュース」の発行（同21年1月10日）</td>
</tr>
<tr>
<td>5. 数百枚のふとんを戦災者に販売</td>
</tr>
<tr>
<td>6. 全町民民座談会</td>
</tr>
<tr>
<td>7. 弁論会（同21年3月10日）</td>
</tr>
<tr>
<td>8. 英語講習会（於長沢クラブ，水・土の週2回）</td>
</tr>
<tr>
<td>9. 婦人参政権説明会（於国民学校）</td>
</tr>
<tr>
<td>10. 桑の根から油をとる講習会</td>
</tr>
<tr>
<td>11. 女子部，立川の病院に親病兵の慰安訪問（熊川と合同，3月28日）</td>
</tr>
<tr>
<td>12. 読書会発足</td>
</tr>
<tr>
<td>13. お花の講習会（4月）</td>
</tr>
<tr>
<td>14. 素人演芸会（9月）</td>
</tr>
<tr>
<td>15. 大久野青年団（日の出町）との交流（10月）</td>
</tr>
<tr>
<td>16. 青年団農場</td>
</tr>
<tr>
<td>17. わらぞうりの講習会</td>
</tr>
<tr>
<td>18. 墓地掃除・川さらい</td>
</tr>
<tr>
<td>19. サツマイモ苗床の夜警</td>
</tr>
<tr>
<td>20. 西多摩郡連合青年団結成準備</td>
</tr>
<tr>
<td>21. 月報『多摩の礎』発行（創刊は3月か）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

『ふっさっ子』・『青年団ニュース』などから作成

習会などを次、文化創造への第一歩ともいえる。

『多摩の礎』福生青年団の月報『多摩の礎』と、昭和二年三月に創刊号が発行されたことが推定されるが、現存する第一巻第二号が同年四月発行）。その後、八号（同年十二月）まで発行されたことが確認されている。ただし、一、四、五号は未確認である。

内容は従員の意見、主張、エッセイ、小説、詩、俳句、短歌、記録等々で、豊富なものになっている。掲載された従員の主張や意見から、青年たちの上に直前まで心身双方に覆いか
図V-102『多摩の礎』5月号
（橋本家文書）

第1節 戦後地域文化運動と福生の青年

ぶさっていた“戦争”という巨大な怪物の翼から、青年たちが何か飛び出し、新しい国家づくりの一員として役割を果たすようになることを願って、それぞれが葛藤している様がうかがわれるのである。

次第第四支部の団員の意見（日本「多摩の礎」第一号）は、「国民自らの戦争責任を、鋭く問いている。」点とふふには余りに大き過ぎる。建国以来の歴史を一朝にして東西に滅し去った。だが、必ずしもその責任を負うことが難しい」と述べている。

顧れば、大東亜総戦及び支那事変の在上海、南京陥落の時、我々は国をあげて熱狂し戦勝を祝したのではないかか。

それが作戦不利となり、終戦となるや、国民には責任はないとされ、我々は敗戦というべき現実を初めて体験した。支那事変当時には支那から帰ってくる人々の土産話を笑ってきいてもが、それが現実の日本の姿となってしまったのである。然し、敗戦といふものは、こんなに生やさしいものであろうか。

私が日本には
第5編 第7章 戦争と民衆

試練の嵐が吹いてくるのだ。之から益々酷しさを増して来るのだ。

古き事、過去去ったことを反省することは必要であるが、それのみとらわれるということなく、新しい自由の下に、

民主の日本を建設しようではないか。

国民にも軍部の暴走を阻止できなかったことの厳しさ反省が必要であることを説きながら、その反省にのみとらわれず、

この自由社会のもとで、民主的な国家を一日も早く建設しようと呼びかけている。

冷靜に、客観的に「戦争」というものをかえりみると、戦争責任を他人に、ある

いは軍閥や官吏などに一方的に押しつけるのでなく、自分自身への自己批判を要請している。

青年たちにはそれだけ

団員諸君読んで下さい。

皆さんの戦争は終りました。そして静かな平和なる春が、再び廻って来ようとして居ります。でも皆さん、私達は只

ぼんやりと戦争前と変わらない様な生活を続けて居て良いのでしょうか？

私達はこの戦争を何と教えられたのであろう。『聖戦』と教えられました。『世界平和の戦い』と教えられました。

四支部（不死未来水劫居士）

若い人達は時の指導者達に、この様に教えられました。それは分かりではありません。そう信じさせてくれたの

でした。（略）
第１節 戦後地域文化運動と福生の青年

す、その時偉そうな事を言って居た人達が、果して何をして居たのであら。私は敢て言ひます。私は現の人の人格を信用し、尊敬する事さえ出来ません。

「昨日」教えられ、「世界平和の戦い」だからといって若者を戦争に駆り立てた指導者たちの欺瞞さに、

純粋な青年の心は激しい憎悪さえ覚えているのである。人格を疑わざるを得ないという結論に達している。

戦後の地域社会の中で、復員して来た若者をも怒らせて、老壮青年は、戦争へのかわり方の違いをひきずりながら、

国婦会の役員でもあり、教師でもあり、軍の幹部でもあたたけだが、その近寄にいるかつの指導者たちと、

兵隊になってしまって南に北に、遠く故国を離れて、或は国上空に、喜んで挺身隊に、特攻隊に加えり死んで行った人々との、

の礎と終戦一周年特輯号」を歩くのはなかなかむずかしい。『虜餞反動の縛、封建の夢さめやるかな古き官僚群』前、

といえども、歩んでも見た道というよりは、むしろ歩まれて来た道、という過去の分析は、正錠を射った、

と闘うが横たわっているのである。心新に光を求めて、若き力を운동進ます。早く早くさめよ日本「わ

層の特権であろう。
第5編 第7章 戦争と民衆

図V-103 「読書会報」No.1（昭和22年1月3日）（橋本家文書）

『多摩の礎』にあらわれた福生青年団の健全な精神と、意欲に燃える行動力は歴史的にも高い評価を与えてもいいのではないか。[青年団の読書会]橋本孝蔵は、東田平治の読書指導方針に依拠して立業し、読書のあり方を示した。読書のための読書会報が発足した。

（略）私達はこの読書を本を読むのではなく、私達のよう処を求めるようとしている。それは決してイスラムの問題ではない。それはあくまで私の自身でなければならない。場所、そして自分の進むべき道、そこに個人の確立があるとおもえない。私と云ふ個人は、決して本を読むことを日課にし、読んだ本は必らず記すという考え方で、読書日記を記録しておけばということである。橋本は自分が中心ではじめた『読書会』について、次のように記している（『読書会報』）。「読書会について」（読書会報）一、二、三月号。
第1節 戦後地域文化運動と福生の青年

知識の為め…ましてインターネットと呼ばれる為の読書ではない。併し知識を得る事は私と云ふ個性にめざめる一
つの道であり、過程である。ですから一農夫がゲーテを語り、トルストイを読む事をは不自然ではないのです。か
らだけでは敗戦日本を救ふ事は出来ない。特に農村の篤農青年をつくる場合さうであった。併しその様な道か
存在してある。私達は先づ学ばねばならない。それが第一の問題です。トルストイを読む事は不自然ではないのです。か
農村問題を論じ…、そうした処に始めて個が生まれて来るのです。

この日本民主化の道も出来るでせう。

読書の本質を論じた文であるが、ここには長い間、「個」や「私」が圧迫されていった時代からの解放への熱い思
読書と果たして出来た文であるが、ここには長い間、「個」や「私」が圧迫されていった時代からの解放への熱い思
いが込められている。個の確立…こぞ、近代社会における人間のもっとも根元的な条件であることを前提に、読書
というものを考えているのである。けっして「天皇の子」や「平民」ではない。そのためにこそ、私にめざめる
日本民主化へとつながるという。

橋本が考えた青年団の読書会は、芽は小さいけれど、その結実の先は、壮大な道に結び付いている。この文そのもの
成長して来た。そうしたものはあまりにひん弱で、ただ雑談に終わってしまったのです。しかし会合の下に、よりよい
強い芽が新しい歩みを始めたと言う事は、何により喜ばしい事である」と述懐している（橋本「読書会について」）
すでに「強い芽」が吹きだしているという。

毎月一回の例会は、およそ次ののような活動である。図書の交換をおこなわせ、義務である一か月のそれぞれの読書日記が提出され、そのあとお互いの感想を述べあう。感想発表では、関心を強くもっている少数の人たちだけの議論になるが、その本を読まなかった者や、他の分野に関心を持っている者がおり残されることがしばしばあった。そのために「説説」のようなものを決めて、読書会的討論することが検討される代わりにしているが、いずれにしてしても会員は「例会毎に一人二人と飛び込んで来た人達」を加わって、昭和二一年二月時点での全員の読書日記のデータは、頁数で二万五百七十一頁、冊数で一四一冊、つまり一人一日平均三〇・五頁読んだことになる。全員のデータが揃っていないので、平均というより多少の偏りはあるが、およそその数だとしても、日課として三〇頁以上の本をコンスタントに読みつづけることの意義とその効果は大きい。目的にかかげた自己覚醒に当然つながってくると思われる。

こうした着実な積み重ねが、次々と新しい芽を生みだしていく土壌づくりとなったといえる。過言ではないだろうか。
第2節 戦前地域文化運動と熊川の青年

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

図V-104『ふるさと』第17号（昭和21年8月20日）

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。

昭和20年1月2日、並木のところを事務局として、「ふるさと会」が発足し、同時に会誌『ふるさと』を発行しはじめた。並木の個人色が強いが、目的や使命は壮大である。並木が考えていた「ふるさと」の使命（『ふるさと』第1号）と、その後のさまざまな模索、という意味合いが強く感じられる。
第5編 第7章 戦争と民衆

― 分自ら、自らがこの「新らしい局面」を「戦え、取ったものでない」とことに「困難」を「不安」を感じてはいるが、
― 青年を学び、青年団を学び、郷土を学び、祖国を学び、ぶことによって、郷土や祖国の再建を果たそうと強い調子で叫んでいるのである。青年の力の結集がなければ成し遂げられないと思いが文面に表われている。

― 亀井が町村、私が家等に対する認識を深めた。

― 青年層の叫びをのせ、未知の者との意見の交換を行って互に知りあい、大は世界、日本についての認識、小は

― 自分自身の力一杯の思考を通じて論じられてきた。《ふるさと》に於いては、種々の問題が他人のうけうけでなく、自分自身

― 伴歳（のちの岩下）の文である。

― 明朗性

― 佐藤社会不安を取り除くための取り締まり

― 学習の場としての青年学校運営である。そのために《ふるさと》に於いては、種々の問題が他人のうけうけでなく、自分自身

― の問題として、自分の立場、青年団の立場、郷土の立場を通して実際に経験し、又しつつある問題として、しか

― 《ふるさと》はそれを実践してきたという自負がある。

― 『ふるさと』は二五号（昭和二二年一月二〇日）まで確認されているが、発行二周年にあたる二十四号（同年一一
第2節 戦後地域文化運動と熊川の青年

月三日（）、一号から二号までの大半の原稿の並木を除く執筆陣の執筆回数を掲載されているが、教員をはじめ、農業、
勤労者、学生など延べ二六名に及んでいる。地域別でも福生と熊川が各八名、あとは青梅町、五日市町、瑞穂町、増
戸村（五日市町）、東秋留村（秋川市）、大久野村（日の出町）、西多摩村（羽村市）と都内が各二
名で、西多摩各地に広範な執筆者をかかえていた。また読者の方も、最初は三、四〇〇人だったのが次第に増加し、
終わり頃には二、三〇〇〇人にもなっていた。

つまり、「ふるさと」は並木と浜中を核に、熊川と福生の在住者が支え、並木つながっている西多摩各地の教員
などが広くバックアップしながら成り立っていたということができる。これらの参加者たちがまた、その後の西多摩
各地での教育と地域文化運動の中心となっていくのである。

各地の参加者二六名は次のとおりである。（）内の数字は執筆回数。

【浜中伴蔵（三）】、下田寿二（六）、細谷利雄（六）、渋谷正男（五）、児島春之助（四）、川倉克己（三）、田島定雄
（二）、長谷川正（三）、松本英之（六）、鈴木茂男（四）、山崎繁男（二）、石川利雄（二）、あとは一
回の木下虎雄、到村孝一、関口俊茂、来住野嘉平、石川照子、篠崎久治、唐沢健一、小林梅子、浦野新一、伊藤勝太
郎、飯田栄彦、中野宗一、井梅伊助。

生活文化創造

『ふっさ』と

『ふっさ』に合流

『ふっさ』という名の会誌を出していた。現物は未確認であるが、中止し、『ふっさ』に【ふっさ】と

生活文化創造

『ふっさ』と

『ふっさ』に合流

『ふっさ』という名の会誌を出していた。現物は未確認であるが、中止し、『ふっさ』に【ふっさ】と

生活文化創造

『ふっさ』と

『ふっさ』に合流

『ふっさ』という名の会誌を出していた。現物は未確認であるが、中止し、『ふっさ』に【ふっさ】と

生活文化創造

『ふっさ』と

『ふっさ』に合流

『ふっさ』という名の会誌を出していた。現物は未確認であるが、中止し、『ふっさ』に【ふっさ】と

生活文化創造

『ふっさ』と

『ふっさ』に合流

『ふっさ』という名の会誌を出していた。現物は未確認であるが、中止し、『ふっさ』に【ふっさ】と

生活文化創造

『ふっさ』と

『ふっさ』に合流

『ふっさ』という名の会誌を出していた。現物は未確認であるが、中止し、『ふっさ』に【ふっさ】と

生活文化創造

『ふっさ』と

『ふっさ』に合流

『ふっさ』という名の会誌を出していた。現物は未確認であるが、中止し、『ふっさ』に【ふっさ】と

生活文化創造

『ふっさ』と

『ふっさ』に合流

『ふっさ』という名の会誌を出していた。現物は未確認であるが、中止し、『ふっさ』に【ふっさ】と

生活文化創造

『ふっさ』と

『ふっさ』に合流

『ふっさ』という名の会誌を出していた。現物は未確認であるが、中止し、『ふっさ』に【ふっさ】と

生活文化創造

『ふっさ』と

『ふっさ』に合流

『ふっさ』という名の会誌を出ていた
第2節 戦後地域文化運動と熊川の青年

地域生活に腰を据えた運動は、並木の『ふるさと』と浜中の『ふっさ』との合体で、新しい本流はさらに力強くなっていったといえる。この『ふるさと』の執筆者の輪が、それぞれ独自の活動の場へと拡がっていたのである。

熊川青年団

熊川の森田正は、戦後の熊川青年団について次のように語っている。「俺が復員してきてから、今の地名の男女が集まって準備ができた。皆の話し合いで私が団長、副団長に津沢義男ということになった。（座談会・福生町青年団）『ふっさ』子・文。熊川青年団の戦後の出発は、復員兵と並木鳴雄の出会いがきっかけであった。

「若者が動きを気にしていたというように、今後の社会のあり方と混乱期の中の青年の生き方を重ねあわせて考えてみようということが、森田や津沢などに共通していた。一人ではその先の方向を見い出ることが難しい。」（前同）

２年一月二五日まで福生町町長が参加してきたことの意味は大きい。石川弥八郎氏が我々の中に入ってきてくれました（前同）」という。村の中核的な存在の石川（昭和二〇年一月一日から戦をはさんで中に入った）（前同）という。
昭和二十一年四月一日、マッカーチー司令部特別事務部官民教育局報刊課のビックリング大尉が、「日本の青年団は何を考え、何を為しているか」を知るために、全国数か所の青年団を視察したが、そのうちの一つに熊川青年団が選ばれた。それは石川が運動して招いたといえる。日本青年団は「ヒットラー・ゲンツのように考えてあの元大日蓮宗青年団総務長の石川真作である。青年団は「飾らない、ありのままを見ていただく」ことににして、いつもどおりの活動を過ごした。雑誌『青年』の輪読から討論に入り、大体次の点を議題として討論は展開された。①敗戦の原因と戦争の責任としての増産運動について。②世界平和・新日本の建設の実現のために、今青年は何をすべきかという大テーマと同時に、農村の青年の社会問題を大いに討議して、その解決法を見出していただきたい。③肥料の問題。④過剩人口の解決。⑤農村青年の経済問題。⑥農村の青年の悩み。⑦農村の青年の悩み。⑧農村の青年の悩み。⑨農村の青年の悩み。⑩農村の青年の悩み。その実際、視察を終えたビックリングは熊川の青年に次のように語った。「今日、熊川の青年達が行ったような重要なものに興味を養うのである。真剣の連続は逆に逆の効果となる。この意味から今日皆さんさんが言われたようなこと。
第2節 戦後地域文化運動と熊川の青年

表V-25 熊川青年団の地域活動（昭和21〜22年）

| 地域活動内容 |  
|----------------|------------------|
| 1 | 熊川第二小学校の卒業生と幹部の懇談会（昭和21年3月12日） |
| 2 | 宿泊練成会（同年3月15〜19日） |
| 3 | 発明工夫展覧会（同年4月） |
| 4 | 素人演芸会（同年4月20日） |
| 5 | 『家の光』読書会 |
| 6 | 町長選の立合演説会主催 |
| 7 | 北部をうけた人のための衣類バザー |
| 8 | 被災者の家の修理 |
| 9 | "戦災者に凍ってゆく冬がやってくる。救援の手をつ"というポスター作成 |
| 10 | "住民の和"を目指して、みこしをかついで熊川地区一周 |
| 11 | 婦人参政権の問題を取り上げた巡回映画会開催 |
| 12 | 農産物品評会（同年11月23〜24日） |
| 13 | 熊川保育園設置運動展開 |
| 14 | 宮城の清掃奉仕（昭和22年5月12〜14日） |
| 15 | 決戦した熊川の堤防工事手伝い（同年9月） |
| 16 | ガリ版の会報発行（東山秀夫、児島春之助らが中心） |

新井進雄『草の根でつながる西多摩の青年――熊川の中の地域文化運動その4』(『風人・8』)で作成した項目に、『ふるさと11・12』掲載の「西多摩郡青年団懇談会」（1）（2）の熊川青年団の発言から補充した。

討論の共存が大事だと説いているが、熊川青年団にいくつの宿題が出していた。「私達のデモクラシー」というテーマで考えてみてくれという意味である。マが真剣に考えていることを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでがめくれば、文人がいうことを、又責任をもって行っただけでが
活動”についてもいい。一方で「首にマフラーやま」と毎日をぶらぶらして単調な流行歌をうたい、声高らかブロー

第三節
「あかざ」にみる文学と青年の苦悩

地域社会の民主化

そのうらの代表的な活動に「あかざ社」がある。発足は「昭和二零年（昭和）夏頃」（刈込一

昭和五年に福生・熊川両村が合併して福生町となっているが、なぜか青年団は、前述のように二つの人団が別々に行動していた。戦後、いままでのような形では、「今後の発展に支障がある」ということで、両団の幹部がたびたび交
流して、その気運が盛りあがってきた（森田正の発言「座談会・福生町青年団」ということで）、「かきおし」

二一九年九月八日と二三日に準備会を開き、一〇月のはじめに両団合併が成立したのである。合併を機会に、「理想」

という色刷りの機関誌が発行されるようになる。ほぼ同じ頃、西多摩郡連合青年団（郡団）発足へ向けた動きがあ

り、福生青年団の橋本喜蔵らが中心となってまとめて九月八日に清梅の初音座で結成式をおこなっている。町村の単位

の青年団が、郡単位での横のつながりや交流ができるようになるのである。そのことはまた、それぞれの青年団活

動の活性化に役立ったのである。
第3節 『あかさ』にみる文学と青年の苦悩

文学会、演劇、音楽、講演、その他あらゆる面にわたり、この町の文化向上のために活動を幅広く展開して行こう。

この会の「規約」と「申し合わせ事項」を見てみよう。

申し合わせ事項

昭和二十一年から二十三年における各地の活動

一 当分の間、定期会合は次の通りとします

日曜日（常勤）午后一時から系統的研究会

日曜日（常勤）午后七時から作品批評会（福生中学で）

二 作品の提出は第四日曜とし、批評会のあとで編集（集）会

三 中央との連絡をはかって促進し、新日本文学会友の会の設立をはかる
規約

この会は、あかぎ社といい、事務所を福生町駅前橋本孝蔵方におきます

三会員は毎月二回、定期会合を持ちます

五会員は毎月拾円の会費を納めます

六この会は次の事を行います

- 作品批評会・研究会（毎月各一回）
- 講習会・座談会
- 八書籍の購入、回覧
- 他文学との連絡していけ

会の性格は「系統的な文学研究会」（第二土曜の午後七時より）とあるように、主に文学好きな仲間が集まった会である。会員相互の作品批評会（第四日曜日の午後一時より）を月二回、定期的に開催する。親団体のようなかたちで新日本文学会とは連携をとることがうたわれている。規約にもあるように「文学の創作、研究を行い、併せて
第3節　『あかぎ』にみる文学と青年の苦悩

郷土の民主化を促進するが目指された。単なる創作活動だけでなく、地域社会の「民主化」をもうひとつの柱としたところに、「あかぎ」グループの特徴が表われている。

文化を社会生活の中心として、精神的、物質的両面にわたって、その全体の発達を進めることで、会員は文化を築き上げる。会員の刈込の文ではあるが（刈込「福生における戦後の文化運動について」「ふっさっこ・ニデ、混沌とした戦後の文化運動について」というもの）中で、文化を築き上げるためには、文化的な環境を整える必要がある。会員たちは、「あかぎ」の母体ともなる新日本文学会の次、新たな結びを結び、創作と民主化の運動を実践することが意識されていた。戦後の民主主義文学運動の原点ともいい「新日本文学会」とのようたところをつなげていることの意味は大きい。それは会員の館田真一の力によるところ大であった。
第5編 第7章 戦争と民衆

また、蔵原惟人、中野重治、宮本百合子、徳永直、戸川鶴次郎、 Ağ井繁治、江口漠、藤森成吉等、プロレタリア文学
を歩むようになった人々と気脈を通じあうものがあったからである。新日本文學会は全国各地に呼びかけて支部や「友の
会」をつくっていくが、そうした組織のひとつに「あかさ」グループは位置していた可能性もある。

なぜなら、会の活動の中での読書会に、新日本文学会の中心的人物の岩上順一の「文学的眺望」がとりあげられた
「あかさ」の巻頭に同会の宮本百合子の「女性の歴史」が引用文が掲載されていたりしているところからも推測されるのである。

あかさ会員の三つのグループ

全員が平等に会にかかわり、責任を持ちあう組織だった。庶務係で実質的な編集長が山崎愛治で、
事務所は橋本孝蔵宅におかれ、会計係も兼務していた。会議は会誌「あかさ」から読みとっていくと、延べ二名が
確認されている。新井勝経「文学グループ「あかさ」の活動」の述べ方でいうと、福生生まれで福生育ちの「在地グループ」が
表V-26をみていただきたかい。「あかさ」の活動期間の中での出リはあるので、常時活動は十数名と推測される。表
V-26は、入会順で、林から和田までの二名が発足時のメンバーである。二名を分類してみると、「第一・第二国
民学校の「教員グループ」、飯田、佐藤、刈込らのように、疎開者や戦後にあって生を求めて移り住むようになっ
た「移住グループ」、福生生まれで福生育ちの「在地グループ」の三グループで構成されていたことがわかる。この
三つの輪が重なることによって、より大きな創造力が生まれたといえるだろう。こうした地域の文化運動が結実する
背景には、単一のグループだけの活動の枠を大きくつく破るエネルギーが必要である。その意味で三つの輪はどれ一
つ欠くことができなかったのではないだろうか。
第3節 『あかざ』にみる文学と青年の苦悩

表V-26 『あかざ』会員名簿

<table>
<thead>
<tr>
<th>氏名</th>
<th>経歴</th>
<th>住所・所属</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 林 八十九</td>
<td>福生中学・国語の教師、大正6年生。静岡県出身、都内から疎開のかたちで福生へ。昭和26年に国立へ移る。</td>
<td>福生第一国民学校</td>
</tr>
<tr>
<td>2 山崎 愛治</td>
<td>近代文学の教員、昭和18年生。</td>
<td>福生第一国民学校</td>
</tr>
<tr>
<td>3 池中 伴助 (岩下)</td>
<td>復員して第一国民学校教員に復職、「ふっさ」という会誌を発行。並木のあと「ふるさと」を編集。</td>
<td>福生第一国民学校</td>
</tr>
<tr>
<td>4 並木 嶋雄</td>
<td>第二国民学校教頭、「ふるさと」会を結成、学校の会誌発行。</td>
<td>福生第二国民学校</td>
</tr>
<tr>
<td>5 菊池 俊茂</td>
<td>第二国民学校教員</td>
<td>福生第二国民学校</td>
</tr>
<tr>
<td>6 今井 誠志郎</td>
<td>東秋留国民学校教員</td>
<td>東秋留国民学校 (羽村)</td>
</tr>
<tr>
<td>7 今井 信次郎</td>
<td>西多摩国民学校教員、明治39年生。岐阜県出身、小畑村の生活書を読む。昭和11年に西多摩小に赴任し、生活書を読む。昭和23年、西多摩民主主義研究会発足。西多摩自由懐話会や西多摩夏期大学の中心指導者。</td>
<td>西多摩国民学校 (羽村)</td>
</tr>
<tr>
<td>8 館田 真一</td>
<td>西多摩国民学校教員、明治39年生。岐阜県出身、小畑村の生活書を読む。昭和11年に西多摩小に赴任し、生活書を読む。昭和23年、西多摩民主主義研究会発足。西多摩自由懐話会や西多摩夏期大学の中心指導者。</td>
<td>福生町福生 1058</td>
</tr>
<tr>
<td>9 佐藤文之助</td>
<td>佐藤文之助の自宅に下宿していた。青森県出身。</td>
<td>福生町福生 1058</td>
</tr>
<tr>
<td>10 佐藤三郎</td>
<td>戦前から福生青年団長、戦後も福生と熊川合同の福生町青年団の団長をつとめる。西多摩自由懐話会や西多摩夏期大学にも参加、福生町役場勤務。</td>
<td>福生町福生 767</td>
</tr>
<tr>
<td>11 村本 正雄</td>
<td>戦中は落傘部隊に所属、復員軍人</td>
<td>福生町福生</td>
</tr>
<tr>
<td>12 立井 弘一郎</td>
<td>立川にも在住していた国鉄職員。</td>
<td>福生町・原茂方</td>
</tr>
<tr>
<td>13 小 作 孝一</td>
<td>西多摩村（羽村）</td>
<td>西多摩村（羽村）</td>
</tr>
<tr>
<td>14 佐藤 三郎</td>
<td>『あかざ』7号から前掲載</td>
<td>福生町</td>
</tr>
<tr>
<td>15 山崎 茂男</td>
<td>そろばん会主宰・道芸会会員</td>
<td>福生町</td>
</tr>
<tr>
<td>16 笠木 裕子</td>
<td>福生町</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17 村尾 千代子</td>
<td>福生町</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18 笠木 玲子</td>
<td>福生町</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

367
<table>
<thead>
<tr>
<th>氏名</th>
<th>経歴</th>
<th>住所・所属</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>19</td>
<td>宮田義勝</td>
<td>10号から参加</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>森田実</td>
<td>表紙・扉絵担当、裁判所書記、青森県出身</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>伊豆山崎子</td>
<td>夫が青年団員・母が保母</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>細谷利男</td>
<td>福生青年団員・農業・読書グループの「道芝会」主宰。『多摩の礎』発行</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>渡谷節子</td>
<td>15号から登場</td>
</tr>
<tr>
<td>24</td>
<td>町田（不明）</td>
<td>15号から登場</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>村野久子</td>
<td>18号から登場</td>
</tr>
<tr>
<td>26</td>
<td>奥石泉</td>
<td>ソ連抑留・復員軍人・塗装屋から塗装工業・妻が福生の人、のち渋谷で会社経営・再度福生に戻る、演劇で演出担当</td>
</tr>
<tr>
<td>27</td>
<td>井草春子</td>
<td>『あかざ』14・19号に執筆</td>
</tr>
<tr>
<td>28</td>
<td>和田照子</td>
<td>『あかざ』15号に執筆</td>
</tr>
<tr>
<td>29</td>
<td>館田祥子</td>
<td>『あかざ』18号に執筆</td>
</tr>
</tbody>
</table>

1. 名前の順序は、号の若いほうから回覧順序に登場してきた順。不明の号が会員全員を網羅しているわけではない。
2. 27・28・29の女性三名は、『あかざ』の回覧順序に掲載はないが、『あかざ』に執筆しているので会員とみなした。和田弘一郎・館田真一の夫人か。
3. 「神戸孝三」は橋本孝顯のこととして推測した。
4. 佐佐美静治からの聞き取り（1992・11・29）で補充。
5. 山崎愛治・佐藤文之助からの聞き取りで補充。
6. 新井勝裕「文学グループ「あかざ」の活動」（『陽人・9』）の表をもとに修正・補充した。

一年半つづいた会誌『あかざ』の発行
昭和二年（昭和）二月に第一号を発行して以来、翌三月二月までの一三号までと同二三月一月とつづく。この一月号の空白があったら、一七号のあとでは定期発行がつづき、一七号のあとからプランクがあったあと、一四号から一七号まで発行は一年半できつづいたことになる。この期間の間に二九人ほどの会員の創作活動は凝縮している。次に、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌として、会誌はドリルではなく、会員の持ち寄り原稿を編集し、それに表紙、目次、編集後記を
第3節 『あかぎ』にみる文学と青年の苦悩

方法であった。つまりオリジナルな肉筆冊子が一冊作成されたのである。

『あかぎ』の内容は、現存する号を通覧してみると、詩が圧倒的に多い。

次に短編小説のような創作、随筆、意見などがあり、最後に前号の作品の読後感や合評会記録、会員通信などがついている。執筆者では毎号必ず作品を載せているのが山崎愛治で、回数も飛び抜けて多い。次に館田、刈込、橋本、並木、佐藤とつづく。実質的にも山崎が

この会をひっぱっていたことがわかる。例会の場所も山崎が所属した学校や山崎の自宅がもっぱら使われていた。

館田もまた毎号のように作品を発表していたが、館田は『文学は政治とはながる。あらゆるものをつながる』TEA・ROOMを

E・ROOMを『あかぎ・一九』と仰って、『文学を投げるということは自己を激むことに外ならない。いつでもできることが必要であろう』（前同）TEA・ROOMと

ように、館田の主張は厳しい。現実を踏まえ、たじろいでいる仲間たちに、

毅然とした態度でのぞむことを要求している。

そこで『あなたが同じ思いの人々と丸い輪をつくって、どうし

たらその胸を明るく明日の希望につながくことが出来るかを話し

し合おう』（あかぎ・一九）と、力の弱いものの連帯を呼びかけ

图 V-107 回覧順序

369
第5編 第7章 戦争と民衆

【あかぎ】の作品の中では別途、自分の戦争体験をひきずりながら、格闘していた。落下傘部隊に

「私たちは戦争という恐怖が人一倍のものがあった。次に新たな文を『あかぎ』と読む

と、一人の人間が戦争とどれだけ深い関係を結んでしまったのかを読みたいことがあるのである。

かつての戦争の日、私はこの戦争が日本にとって敗戦であったと感じたが、無鉄砲をよくと祈り願った事は一度でもなかった。

その混乱の中で、新しい世界視間がほのぼのと、しかしそれをさきがしはじめたのを私は知って居る。私

中からどう一筋の光明を見つけていくのか。私のひとりの巨巖が断頭台上にかけて散る日。夜明けとなる

をこの頃を考えてます、私はこの頃を考えてます、

負けることなど一度だって考えたことのない若者に、「敗戦の現実は極度の「混乱」を招いたのである。その混乱の

取る残された私の岩石のくだけ散る日は何時であろう

中からどう一筋の光明を見つけていくのか。私のひとりの巨巖が断頭台にかけて散る日。夜明けとなる

をこの頃を考えてます、私はこの頃を考えてます、

体験する文学への原点でもあった。
第3節 『あかぎ』にみる文学と青年の苦悩

「あかぎ」の創刊以来順調につづけてきた『あかぎ』の活動と、一帯の昭和二三年暮頃にはひとつの壁にぶち

「あかぎ」の活動は、一帯の昭和二三年暮頃にはひとつの壁にぶち

脱皮を要求されている時なのでです。『あかぎ』・一帯

どうきり結んでいくことができるのかを問うていた。山崎愛治はそれを「人間的立場」という言葉で表現し、そこに

こそ文学の原点があると主張していた。会員自らが分析していた。会員の橋本は、「生活と文学を

ともいっている。そのためには「生きる」ことの厳しさが求められるのである。

『あかぎ』は二年もたちずに終刊に追い込まれていったのはなぜなのか。個々の会員の生き方の異なったところを

生活と全面的に向かう力が失われてしまったのか。「生きる事」""散布を書く事""つまり『文学』と

との間に隙間が生じ、ペンを持たない生易な道に逃れてしまうという力が失われてしまったのか。生易

の地域の文化運動のいきつつ、先を暗示するような、『あかぎ』の幕切れたあった。はたしてそこにまっすぐ政治的イデオロギーのないのか。その点はまだ検証がでてきない。ただこの短期間の文
第四節 「学ぶ場」の自主開設と地域文化の開花

西多摩自由懇

の設立

が福生で開かれた。その設立趣意書（橋本孝蔵著文書）は次のようにある。

われわれの周囲には、われわれの手で解決せねばならない事柄が山積みしています。地方自治・地域文化・

然し一人一人は皆、燃えたぎる心を持ち乍ら今尚それが一つの大きな力になって動いてはいません。不満を己

の大道を切り拓いてゆくもののは他の誰でもありません。われわれ自身なのです。

再び古い鎌の中に閉じこもってしまってはどうなるのですか。

われわれは焦燥の念やむなく、懇話会を創る決心をしました。西多摩に住むあらゆる層、あらゆる年齢を問わ

って、西多摩自由懇話会はつくられるのです。そして自由に意見を述べ合い、相談し、仕事をして一つ一つ実

業してゆきたいのです。

自治、住みよくするにはどうしたらよいか。

文化、自立を押しすめてゆく美しい心。

われわれは先ず第一にこの夜、七月十三日から八月三十一日までの毎日曜日、西多摩夏期大学の開講を準備して
自由懇話会

地方自治の確立、地方文化の創造のための連帯という呼びかけである。年齢や男女の差別もなく、自由な立場で
不毛なのは、人権の尊重、民主主義の徹底、および大衆の生活安
定を期して、科学が振興され、芸術が尊重されても、
の元八王子を中心に『多摩自由懇話会』が発足（昭和二十二年六月）していたが、『西多摩自由懇話会』もおそらくこ
の影響下に誕生したということを確実である。『自由懇話会』の基本
の視座は、人権の尊重、民主主義の徹底、および大衆の生活安
定を期して、科学が振興され、芸術が尊重されても、
の国は文化国家と呼ばれるに値しない。それ故に、われわれの
文化運動は、労働者、農民および広汎なる人民層の政治闘争およ
び経済闘争と固く提携して行かなければならないと、という立場に
あった。そして、一農村文化の高揚、二知識階級と大衆との知
識的文化的隔たりの解消、三男女の知的水準の隔たりの解消の

図V-108 『自由懇話会』創刊号

373
第5編 第7章 戦争と民衆

図V-109 「原始林」第1号（昭和22年12月10日）

図V-110 「多摩自由大学」開設案内（昭和21年11月）

三つの目標をかかげて、全国の同志にアピールを送っていた。この呼びかけを受けて、「多摩自由大学」開設努力は三郡二市（八王子・立川、東京市・埼玉・千葉・神奈川などから六百名の応募があった。開講日当日には三〇〇名を越える聴講生が集まっていた。この聴講生の中には西多摩郡からは六名参加した。
表 V-27 西多摩暑期大学カリキュラム一覧

<table>
<thead>
<tr>
<th>開講年月日</th>
<th>講師名</th>
<th>講座内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 22・7・13</td>
<td>新島繁</td>
<td>青年と文化</td>
</tr>
<tr>
<td>2 7・20</td>
<td>鈴木信太郎</td>
<td>絵画国際情勢</td>
</tr>
<tr>
<td>3 7・27</td>
<td>海崎成之助</td>
<td>国際情勢</td>
</tr>
<tr>
<td>4 8・3</td>
<td>中村良民</td>
<td>ジャーナリズム</td>
</tr>
<tr>
<td>5 8・10</td>
<td>佐藤又堂</td>
<td>小民族学</td>
</tr>
<tr>
<td>6 8・17</td>
<td>永角圭子</td>
<td>恋愛論</td>
</tr>
<tr>
<td>7 8・24</td>
<td>関本新次郎</td>
<td>鄉土史</td>
</tr>
<tr>
<td>8 8・31</td>
<td>上溝井清治</td>
<td>農業問題</td>
</tr>
</tbody>
</table>

1 この一覧は、西多摩懇親会ニュース『原始林』（発行人・紀田真一、発行所・西多摩文化団体懇親会、昭和22年12月10日発行）の記事から作成した。

2 初期の講座内容は以下の通りである。
①官本百合子（新しき文化のために）
②平野義太郎（国際情勢と今後の日本）
③服部之松（近代日本史）
④宮本浩ら（家族制度と新しい倫理）
⑤深谷進（日本農業の将来）
⑥杉山五郎（文学文化の構想）
第5編 第7章 戦争と民衆

図V-111 西多摩夏期大学聴講券

<table>
<thead>
<tr>
<th>事由</th>
<th>西多摩夏期大学</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>年</td>
<td>1938</td>
</tr>
<tr>
<td>氏名</td>
<td>未定</td>
</tr>
</tbody>
</table>

南多摩を中心にした「多摩自由大学」、西多摩、とくに福生を中核として開設された「西多摩夏期大学」は前述の

まず充実した講師陣におとらしく、当初予定していた講座で開設できなかったも

の多いが、絵画、文学、音楽、歴史、演劇、文化、ジャーナリズム、自然、国際情勢、憲法、農業、婦人など、じっと幅広い分野におよんでいます。ということは、これだけの講師を呼べる下地が西多摩にもあったということであろう。実際には、これだけの講師で講座を比較すれば、多摩自由大学に（第一期）と同じ講師はわずかに

一人（新島紛のみ）しかいなかった。実際に開設した講座で比較すればは、多摩自由大学に（第一期）と同じ講師はわずかに

学講坐を兼ねる、講師の講演で満員だった（狭い「福生における戦後の文化活動について」）ふっさっとこりこりという。ちなみに初日の七月一日には

の講師は三三〇名、一日だけでの会員を加えると、なんと延べ三千〇〇人ににもおよんだという報告もある。毎回七〇人から一〇〇人くらいが参加していたともいい

と、教育の側も、なんの束縛もない。自由教室は久しぶりであり、それだけ

に、西多摩の独自性は大きいものがあ
第4節 「学ぶ場」の自主開設と地域文化の開花

とおりであるが、民衆が学ぶ場は三多摩各地に生まれていた。たとえば武蔵野町（武蔵野市）では「社会大学ゼミナール」（昭和20年5月）が開設され、立川での「夏期大学」（北多摩連合青年団主催・同年8月）や西多摩郡五日市町の「西多摩社会学校」（同年9月）も開設された。元八王子や福生だけが抜き出していたわけではない。それはまた学びたいという欲求の実現の場として、次々に開設され、三多摩の民衆の期待を大いにこたえていた。

これ一連の学習機会の増大は、三多摩の近現代史の歩みと不可分ではなく、底流にある文化創造の伝統がかかるちをかえて噴出してきたとみることができる。その意味で、福生は戦後文化運動の中核を占めていたといえよう。

もってこいの公開講演会は「多摩自由大学」、そのほかに青年部、教育部、経済部、新聞部、芸術部の活動も展開していた。芸術部は「農村演劇実験教室」（※細谷利男が中心）にあり、青年の演劇公演では昭和20年「青春市場」（橋本孝蔵作）、同21年「河童」（遠藤貞雄演出）、同22年「山之司」（森田誠一演出）がごく助役で青年団演劇の演技賞賞を受賞した。また、同24年「八百小鼓」、同25年「人をつなぐ」（樽岡常雄作）、同26年「道芸会」（篠崎久治演出）、絵画グループ「みどり画会」、コーラス会、美術研究会、民主青年同盟などが続いて誕生し、活動をはじめた。
昭和二年三月、「福生そろばん会」をスタートさせる。それは単に「そろばんに向け指先一本の器用さという単なる勉強でなく、その社会に有能な人間になるための一里塚として、山崎は「そろばん会」として、山崎は「そろばん会」を考えていた。そろばん会にゆくことを目指していた。山崎には、そろばん＝文化という考えがあった。そろばん会を拠点に福生という地域に文

図V-112 「そろばん塾月報」第1号

のである。

なかでも山崎茂男の活躍は見逃すことはできない。道芝会の会員だった

いつるしで、ふっさっと。現実に心を痛めていた。なぜならこうし

畅橋三男、「福生算学校三年」の姿に痛切な思いを抱いたからである。青年教師・山崎にとってどうしても看過できない現象であった。
第4節 「学ぶ場」の自主開設と地域文化的な開花

化運動を展開し、定着させていきたいという思いでいっぱいであった。だからこそ、そろばんの学習のほかに、討論会、茶話会、作文回覧、見学会、鑑賞会を開催したのである。一人の若者の発想ではあったが、とくに、1粒の種を播いたのである。それにこたえるように、そろばん会第一期生は「新しい日本の国民の一人として、数多くの努力をしなければならないと思う時（略）」どうかこの算盤会が良し集いになりましょう（略）文化会と云う様な会に進延びて行きます様（略）そろばん会感想文掲と著者の思い

まきこ師弟の思いは一致している。マカ山崎の初発の思いは情熱をもって実践されてゆき、ひとつの路線が敷かれた。それは「そろばん塾月報」昭和四四年三月からはじまり、「珠算学校月報」同二九年六月、九月、「福生珠算学校月報」同三〇年七月、七月、「月刊ぶっさっ子」同四七年一日月刊ぶっさっ子

なお発行がつくっている、一連の月報の歩んできた轍の跡に深く刻印されているのである。月報月刊ぶっさっ子

小さな私塾から出発した「そろばん会」も、福生という地域にしっかりとした根をおろし、そこから育っていった多数の「ぶっさっ子」に有形無形の影響を与えていきることがあると、地域の人と共生し、ともに歩んでいこうという姿勢が徹底的に貫かれたために、貴重な戦後史となっている。

実行委員会発行を参照された。